あの漫画、見つかりました

横田　喜一郎

1．はじめに

本稿は、私が長年夢見てきた成果に辿り着くまでの苦闘を描いたものである。

一度読んだだけの 1970 年のあの漫画は、2012 年春に思い出して以降、４つの図書館を経由して、2015 年春に再び読み返すことが叶った。真の苦闘期間は、本稿で概略を紹介した検索技法を知る以前の期間、「それを必ず見つける」との意欲を失わずに過ごした忍耐の日々である。それに比べれば、試行錯誤ながら検索に着手して以降の日々は、今にして思えば、充実の日々であった。

スタートは、「作者もタイトルも掲載雑誌名も出版時期も忘れましたが、あの漫画を探し当てたいのです。」という、自分だけの願いであった。そしてゴールは、「この漫画、この図書館でコピー入手が可能ですよね」ということの確認、と決めていた。ただし試行錯誤の終盤からは、「もし見つけたら、次はこれをこうしてみたい」というように、ゴールの向こう側についても思いを馳せるようになっていた。

どうやって探し当てたのか、ということを記録した本稿が、他者の検索作業を手伝う役割も担っている方々にとって、何か参考になれば幸いである。

2．覚えていること

あの漫画を読んだのは、小学校４年生の夏休みに、父と関西へ旅行して、瀬戸内海を通って大分に帰る船の中だったはずだ。船中で読み捨てたマンガ雑誌、それは父に買い与えてもらったもの、あるいは誰かが客室に置き忘れたもの、どちらだったのかは思い出せない。確か当時の自分と同じ年齢くらいの少年が主人公だった。これらの記憶が正しいかどうか、それを確かめる手立てを私が持っていた訳ではない。

あの漫画を読んだのが、もし乗船中ではなかったのならば、全く記憶には残らなかったかもしれない。でも自分と主人公は、ほぼ同じ年だったはずだ。船旅中の主人公には、溺死する運命が待っていた。それを描いた漫画を、船旅中の自分が読んでしまった。「自分も主人公と同じく、もしかして？」などと、何か嫌な連想をしたのだろうか。どうだったのか、もう覚えていないし、確かめようもない。

確か主人公は、沈没前の船中で救命胴衣を手に入れようとした。しかし何か邪魔が入った。とうとう救命胴衣は手に入らなかった。「ございません」と呟く主人公の姿を描いたひとコマがあったはずだ。

図書館検索で必須とされる事柄は、全く思い出せない。手がかりを整理すれば右の通り。多分、1970（昭和 45）年の夏に発刊。少年誌か青年誌かは不明。定期刊行物か増刊号かも不明。読切作品であったことは確か。絵柄のよく知られた超有名作家の絵柄、ではなかったような気がする。

まだ具体的に探せない。誰かに助けを求めることもできない。見つかる段取りが整うのは遥か先である。

3．動機

「僕、昔どっかで何か嫌な気分になる漫画を、読んだことがあったんだっけ？」という疑問が、ある時、突然頭をよぎった。2012 年春のことだ。一部分を思い出したから全体が気になり始め、それで復元できた記憶が上記「２」の内容だ。あの漫画の記憶は消えてなかった。あの漫画を読んだこと自体を、一時期忘れていただけだった。それをある拍子で、思い出してしまったのだ。

「あの漫画を読んだ時、何を連想してどんな気分になったのか？」この質問は、あの漫画を再読してからでないと答えようがない。可哀そうな記憶が自分にトラウマとして残っていた、という自覚がないまま、2012年春まで過ごした。私は、あの漫画の、漠然とした記憶の一切を忘却してしまいたいと願っているのだろうか。それとも、また読みたいと願っているのだろうか。このように自問自答した経緯は省略するが、2013年秋に自問自答したところ、以下の答えを得た。

答。また読みたい。再読が叶った暁には、自分なりにストーリー展開を書き換えてしまうか、あるいは新たに続編を書き加えて、あの主人公を救い出す。そしてトラウマとは決別して新しい人生を始める。

4．検索行動の開始以前

「あの漫画は、国会図書館でならば、必ず見つけることができる」という信頼感のようなものを、私は当初から抱いていた。それは私が大学生だった頃、先輩から「我が国の全ての出版物は、漏れなく国会図書館に収蔵されているんだぞ」、と聞かされたことがあって、それをそのまま信じ込んでいたからである。よって、探し当てようと思い立ちながら、まだ見つけきれていない日々の中にあっても、希望を失うことはなかった。

最大の課題は、「あの漫画」を「この漫画」と呼べる状態に置き換えることであった。「これだったんだ」という状態に、早く成りたかった。しかし、「あの漫画」としか呼びようがない状態は、2013年秋以降も続いていた。ところが「探し当てる為の方法を探す」ということについて、ある人物から重要なヒントを授けてもらって以降、文献の検索技法を飛躍的に進歩させることができた。

5．最初の行動

私が2014年夏に行った最初の具体的行動は、国会図書館（ＮＤＬ）の利用者登録をすることであった。お目当ての「あの漫画」を遠隔複写（郵送複写）サービスで入手する日が訪れることを願ってのことである。ＮＤＬのＨＰにアクセス、利用者ＩＤの入手は郵便経由で行った。

大分県立図書館に行ったのは、この頃である。ＮＤＬ複写請求代行サービスがあるとのこと。「あの漫画」のことは後回しにして、全く別件の文献（仮にＡと呼ぶ）の複写請求を申し込みに県図書へ行った。

後日、ＮＤＬ関西館から郵送された文献Ａが県図書に到着したとの知らせを受けた。それを受け取るために県図書を再訪。文献Ａの入った封筒を受け取った直後、私は遂に気持ちが抑えきれなくなり、「作者もタイトルも何の雑誌に載ってたのかも覚えてないんですが、ある漫画を探してるんです」と、口火を切った。うろ覚えのストーリー（前述「２」）と動機（前述「３」）は最小限に抑えて。

「例えば1970年頃のマンガ雑誌の目次が、ザッと閲覧できるような方法はあるか？　それは、ここの図書館の電子端末でもできることなのか？」というようなことを、司書さんに質問したのであった。

6．重要なヒント

「昭和45年頃の少年誌だったのですよね？」　その司書さんは、最初の受け答えで、確かこんな一言を戻して下さったと記憶している。親切に接して下さったのは本当に有り難かった。

「そうです。せめて何の雑誌だったのか、それだけでも判れば・・・」と一人語りを始めてしまった私。

「詳細既知のマンガだったら、他に、沢山あるんじゃないんですか？」　そんな助言が飛び出したのは、

質問を発して何分くらい経ってからだっただろうか。これは重要なヒントだ。

つまりこういうことだ。文献Ａは詳細既知。「あの漫画」は詳細未知。だけど、文献Ｂとでも呼べる別の漫画を、何かひとつ練習問題に取り上げてみては如何ですか？

県図書２階のカウンターに於いて、糸口が明確に見えた。確か私は、古い少年チャンピオンを、１冊だけ捨てずに持っている。手元にある現物をWeb検索すれば良いのだ。やっぱり尋ねてみてよかった。

７．PROXY

プロキシーとは、代理人とか、代わりの物という意味である。検索対象として選んだプロキシーの詳細は下記のとおり。

【タイトル】拒絶反応虫けら　【作者名】芳谷圭児

【掲載誌および発行年月日】週刊少年チャンピオン，1971年4月26日，18号，p165-204.

こういうことが、判っている必要があるのだ。文献Ｂはこれに決めた。現物は既に手元に有るので安心だ。このプロキシーのWeb検索は大成功であった。漫画家・原作者ともに案外と有名。これは単行本にも収録された作品だ。今更わざわざＮＤＬに複写請求する必然性は薄い。

それよりも、少年チャンピオンはじめ各週刊誌にはマニアが居るためからか、掲載作品リストが様々に無償で公開されていることを知ることができたのは収穫であった。プロキシーは、少なくとも２通りのリストから容易に拾うことができた。この手順が後に大いに役立った。

これ以外の収穫として、うろ覚えのマンガ情報を探すＨＰ、例えば「あの漫画なんだった？」というような類のＨＰが沢山ある、ということを知った。

８．検索用のキーワード選び

2014年秋。私は「Yahoo! 検索」と向き合い続けていた。【タイトル】、【作者名】、【掲載雑誌に関する情報】、これら３つのどれも調べがついていない。

もし本気でリメイク作品を作りたいと思っているならば、仮のタイトルすら思いつかないのは情けない。そんな声が、どこかから聞こえたような気がした。オリジナル作品のタイトル、それは「道連れ」だったのではないか？　という仮説を勝手に思いついた。

読切マンガ　道連れ

この条件で検索したところ、約557,000件がヒット。そのタイトルの別マンガが存在することを知った。また「読まなきゃよかった物語」とか「誰かこのマンガ教えてください」とか「トラウマになったアニメ、漫画、写真」といったＨＰが散見された。それらに目を通していくうち、あることに気が付いた。作者が実話を元に描いた漫画というものが、案外数多く存在する。あの漫画も、そうだったのだろうか。戦時中の悲惨な海難事故と関係があるだろうか。

対馬丸が元ネタ　漫画　1970年

この条件で検索してみたら、約81,100件がヒット。沈没船関連の記事が散見される。しかし、あの漫画そのものの手がかりは見つけられない。もっと生々しいキーワードを入れてみよう。

あの漫画は確か　掲載雑誌　救命胴衣　沈没

駄目だ。ヒット件数が多すぎる。セウォル号の事故の記事がやたら混ざってくる。絞り込み条件を追加。

あの漫画は確か　掲載雑誌　救命胴衣　沈没　-韓国　検索　+条件指定

この条件で約3,780件がヒット。閲覧画面2頁目に気になる記事を発見。2014年11月5日のことだ。

９．過去ログ抜粋

検索キーワードに合致した部分が**太字**で表示される仕組みが、閲覧を楽にしてくれている。

あの漫画なんだった？ 37巻目 - どこかに過去ログ落ちてない？

log.shipweb.jp/?mode=datview&board_name...id... - キャッシュ

【**掲載雑誌**または単行本】週漫かゴラクか、とにかくその系統の雑誌でした。 【絵柄】 劇画調だったような。 【その他覚えている事】 **確か**東大生２人組がヤクザを使って日本を乗っ取るとかそんな様な感じで、とにかく建物とか悪役が .... 少年**漫画**板「(゜Д゜)初心者 質問雑談スレ@少漫板」(過去ログ倉庫に格納) ..... その連絡船が嵐で**沈没**し、海に投げ出されてしまう。同じ一個の**救命胴衣**か板きれかに兄と妹はしがみつく。

↑

この抜粋表示された記事の元URLをクリック、落ち着いて内容を熟読。その内容は下記。

あの漫画なんだった？　37巻目　どこかに過去ログ落ちてない？

http://log.shipweb.jp/?mode=datview&board_name=rcomic&thread_key=1304510282&thread_id=45936

859 ：愛蔵版名無しさん ： 2011/07/08(金) 12:36:07.20 ID:??? 相当古いのですが

【タイトル】不明　【作者名】不明　【掲載年または読んだ時期】昭和40年代後半～50年代前半

【掲載雑誌または単行本】少年サンデーかマガジン、ひょっとしてキング

【絵柄】ジョージ秋山ぽかったような絵

【その他覚えている事】幼い頃生き別れになった醜い兄ときれいな妹。その後妹は裕福な家庭に引き取られきれいな服を着て幸せな人生を送っている一方、兄はどん底の人生。青函連絡船か、宇高連絡船だと思うが、連絡船に偶然乗り合わせる事となった。その連絡船が嵐で**沈没**し、海に投げ出されてしまう。同じ一個の**救命胴衣**か板きれかに兄と妹はしがみつく。だが二人を支える余裕は救命胴衣にはない。どの時点かは覚えていないけれど自分の妹であることに気づいた兄は、兄弟であることを告げた後に妹を助けるために自ら海に沈んでいく・・ タイタニックみたいなラストですけれど覚えている方いますか

１０．そうでしたか

愛蔵版名無しさん、情報提供ありがとうございました。そんなあらすじだったのですね。同じ漫画を探している方が居た、ということを知り、本当に嬉しく思いました。ＨＰ中には、誰も答を書き込んでくれていませんでしたね。サンデー、マガジン、キングの３誌を探せば、見つけられるかもしれませんね。

１１．ゴール

少年キング読切リスト（昭和38年～45年）は、Web検索で既に見つけていたので、昭和45年の掲載作品を順次見ていく。「道連れ」というタイトルは含まれていない。おや、34号に「これじゃないだろうか」というものが掲載されている。胸がドキドキしてくる。作品そのものがYahooで拾い読みできるか検索をかけたがヒット無し。国会図書館に、昭和45年頃の少年キングがあるか検索したが、保管なし。

では、どこの図書館なら、昭和45年の少年キングが閲覧可能か。それは明治大学現代マンガ図書館であると、すぐに調べがついた。東京まで行けば、あの漫画を手に取って読める。

東京まで行かずに済む方法はないだろうか。大学付属の図書館同志の連携に期待を込め、別府大学付属図書館を訪問し、司書の方に希望を伝えた。親切なことに、現代マンガ図書館に連絡を取って下さった。嬉しかったです。コピーの取り寄せは不可であることが判明。東京行きを決意。

2015年3月21日、明治大学現代マンガ図書館を訪問。まず少年キング現物の閲覧を申し出て、約45年ぶりにあの漫画を再読。前述の愛蔵版名無しさんからの問い合わせストーリーは、概ね正確に描写されていることが確認できた。私は「主人公は、何かと道連れになって溺れたのでは？」と思っていたのだが、この予想は外れていた。「ございません」と呟く主人公の姿を描いたひとコマ。それは確かに載っていた。やはり可哀そうな姿だ。何とかして助けてあげたい、と思った。

次いでカラーコピーを申し込んだ。「表紙、背表紙、裏表紙、目次のページ、それと本編のここからここまでをお願いします。」 職員さんは、雑誌を破損させぬよう、とても大切に扱いながらコピーしてくれた。

１２．新たなゴールを目指して

2015年3月23日、もう、あの漫画のカラーコピーは手に入れたけれど、総仕上げとしてＮＤＬを訪問。利用者ＩＤを記した「登録証」を持参したので入館はスムーズであった。私が長年夢見てきた姿のひとつが、ＮＤＬの「利用者端末」で文献検索を行う自分の姿であった。今までの検索事柄を、念のため、ここでも検索。結果は同じだったが、これでゴールに辿り着いたと実感できた。

夢見ているうちに、新たなゴールとして、「リメイク作品の執筆」が追加された。あの漫画の作者、山根あおおに先生は、もうお亡くなりになっている。あの漫画に元ネタがあったのか、それをご本人に確認することは叶わぬ夢である。

最近、独自の追加リサーチを進めるうちに、「あの漫画の執筆動機は、恐らくコレ。そして元ネタはコレだったのではないだろうか？」というような情報と出会うことができた。もうトラウマに悩まされることもなくなった。

今は、あの主人公を救い出す手立てについて、あれこれ考え始めている。

（よこた・きいちろう　　溝部学園非常勤講師）